

氏名	東 條 伸 平 とう じょう しん ぺい
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	医 博 第 2 1 号
学位授与の日付	昭 和 3 4 年 3 月 3 1 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	医 学 研 究 科 外 科 系 専 攻
学位論文題目	所謂出血性メトロパチーに於ける下垂体前葉の Gonadotropin 分泌機能に関する研究
	(主 査)
論文調査委員	教 授 三 林 隆 吉 教 授 鈴 江 懐 教 授 早 石 修

論 文 内 容 の 要 旨

無排卵性 Östrogen 過剰を特徴とする「いわゆる出血性メトロパチー」は婦人科領域における内分泌疾患の雄たるものであるが、著者は本症の詳細な臨床観察とともに、特に下垂体前葉の Gonadotropin 分泌機能を検討する目的で尿中核ホルモンの系統的測定を行ない、相当年齢の健康非妊婦人と対比検討し、さらにこれに Gonadotropin あるいは諸種性ステロイドを投与した際の変化をあわせてしらべた。

まず健康非妊婦人尿中 Gonadotropin は若年者では低値だが年齢とともに増す傾向を示し、性成熟期では卵泡期と黄体期の間には差はないが排卵期に特有のピークを示し、さらに閉経後になると著増するのを認めた。

一方、いわゆる出血性メトロパチー患者では、出血開始前に尿中に Gonadotropin は正常排卵期の値を上回って上昇するが、これは主として G A の増加によるもので G B はむしろ低値であり、正常排卵期に比して F S H と L H 分泌の不均衡のあることが判明したが、出血開始とともに尿中 Gonadotropin は両分画ともに減少した。

以上の所見によって、本症における出血は、F S H, L H 両者のアンバランスによる排卵障害、次いで来る Gonadotropin の下降、すなわち Östrogen の過剰分泌、次いで来るその消退によりおこるものであることが推想された。真鍋はこのことを尿中 Östrogen の測定により実証した。

そこで著者は本症患者止血後一定の期間において F S H 作用の強い P.M.S.G と L H 作用の強い H.C.G の同時大量投与を行ない Gonadotropin の不均衡を是正して性周期を正常化せんと企図したところ、予想のごとく多数例に排卵性周期を誘発せしめ得、しかも成功例ではその後長期間にわたり不正出血を来たしたものはなかった。

次に、本症に諸種性ステロイドを投与した際の Gonadotropin 分泌機能を検討したところ、Östrogen 投与例では投与後尿中 Gonadotropin 特に G B の増すものが多く、G A, G B 不均衡の是正、性周期の正常化という治療目的に対し一応の希望を得たが、Progesteron あるいは Androgen 投与では Gonadotropin 分

泌を一時的に抑制するのみで上記の目的に添う成績を得られなかった。

一方動物実験として持続発情白鼠の卵巢および下垂体前葉を組織化学的に検討したところ排卵障害およびFSH分泌の亢進を推想させる所見を得、人における出血性メトロパチーに対比し得ることが判明したのでこれに前記3ステロイドを投与したが、ともに亢進しているFSH分泌を抑制する成績が得られた。

以上により著者はいわゆる出血性メトロパチーの原因がFHS, LH分泌の不均衡による排卵障害、Östrogenの過剰分泌にあることを知り、さらにこの不均衡を是正して排卵性周期を確立するためにはP.M.S.GとH.C.Gの同時大量混合投与法がすぐれていることを実証した。

論文審査の結果の要旨

いわゆる出血性メトロパチー患者の多数症例について出血前、出血中にわたり尿中排泄 Gonadotropin 量、特にその分画を経日的に測定、これを正常成熟婦人の所見と比較、さらに本症とその本態が同じと見なされている持続発情白鼠について下垂体前葉の組織化学的検索を行ない、本症の一次的原因が下垂体からの卵胞刺激ホルモン、黄体形成ホルモン分泌の不均衡による排卵障害であり、これを是正し正常排卵を誘発することが本症治療の根本義であるとの考察に到達した。

よって、従来本症の治療に多く使用されていた Östrogen, Progesteron ならびに Androgen 等のそれぞれ単独投与による臨床成績および尿中排泄 Gonadotropin 所見をかかえる観点から再検討したところ、ろいずれも一時的止血効果は認められたが正常周期誘発の目的は達せられず、卵胞刺激作用の強い妊馬血清性 Gonadotropin と黄体形成作用の強い絨毛性 Gonadotropin を一定の比率で投与することによって初めて正常周期が誘発され、じご不正出血の発来を見ず、この治療法こそ本症に対する原因療法としての意義の大なることを確認し得たものであり、医学博士の学位論文として価値あるものと認定した。

〔主論文公表誌〕

日本内分泌学会誌 第36巻(昭.35)第9号 予定

〔参考論文〕

1. 尿中 Gonadotropin 測定法
(大橋敏郎と共著)
公表誌 日独医報 第3巻(昭.33)第3号
2. 絨毛上皮腫の内分泌学的研究
(大橋敏郎ほか3名と共著)
公表誌 産婦人科の実際 第7巻(昭.33)第10号
3. 無排卵性周期における Gonadotropin 投与の効果
(大橋敏郎ほか2名と共著)
公表誌 産婦人科の世界 第11巻(昭.34)第3号
4. 不妊の内分泌学的研究
(大橋敏郎ほか3名と共著)
公表誌 日独医報 第4巻(昭.35)第4号

5. 甲状腺刺激ホルモンの Column Chromatography
(矢野一哉ほか1名と共著)
公表誌 日本内分泌学会誌 第35巻(昭.35)第11号
6. 妊娠家兔の Gonadotropin 検定並びに Gonadotropin 投与時に於ける腎の糖再吸収能に関する研究
(森下和彦と共著)
公表誌 ホルモンと臨床 第8巻(昭.35)第4号
7. 分娩予定日超過
(大橋敏郎ほか5名と共著)
公表誌 産科と婦人科 第26巻(昭.34)第10号
8. The Pelvic Inclination of Japanese Women in Kyoto District
(京都地方における婦人の骨盤傾斜について)
(赤堀和一郎ほか1名と共著)
公表誌 The Congress Volume of the First Asiatic Congress of Obstetrics & Gynecology
(1957)